

地盤工学・実務シリーズ No.5 切り土法面の調査・設計から施工まで

頁	行()	誤り	正
116	写真-4.3 追加文章	神津島での切り土法面の崩壊(1995年10月7日午後、命日新聞社提供)	神津島での切り土法面の崩壊(1995年10月7日午後、命日新聞社提供) <u>再掲載には、再度毎日新聞社の許可が必要です</u>
123	図-4.30(b)	(b)等価線形解析での物性表示 ⁵²⁾	(b)等価線形解析での物性表示 ⁵⁰⁾

(P127) 表 - 4.14 既往の水平最大加速度推定式

研究者 (発表年)	回帰式	観測地点	A の定義	式および回帰方法等の特徴
金井・他 (1966)	$\log A = 0.61M - P \log R + Q \log T$ $P = 1.66 + 3.60/R$ $Q = 0.167 - 1.83/R$	自立鉱山 GL 300m $Y_p = 5.5 \text{ km/S}$	1 成分	坪井式の活用。 松代地震記録による改訂。 硬地盤の T として Seed et al. (1969) が用いられる。
田村・他 (1979)	$\log A = 0.5K + 0.01K \cdot \log R + 3.0$ $K = 0.043M^2 + 0.89M - 4.93$	鬼怒川 GL 51.67m $V_s = 1.6 \text{ km/S}$	1 成分	山王海ダム、藤原ダム、コイナダムの記録を参考。 式の計数は回帰分析で決めていない。
田村・他 (1984)	式の形は 1979 年と同じであるが、震源深さが 40 km を超える場合は H を震源距離とする。	同上	同上	適用方法の変更。
川島・他 (1984)	$\log A = 0.216M - 1.28 \log(H + 30) + 2.994$	各種地盤 67 地点	2 成分の 合成	地盤種別ごとの層別回帰。 地盤分類 1 の式。
亀田・杉戸 (1984)	$\log A = 0.534M - 1.857 \log(H + 30) + 2.045$ $\log A = 0.0846M + 1.998 \log(H + 30) - 0.00106 \cdot 10^{0.242M} - 30.0$ (H 、上限値)	解放基盤 $V_s = 0.6 - 0.7 \text{ (km/s)}$	サンプル 成分	非定常地震予測モデル (EMP-IB) によるサンプル波形にもとづき決定されている。
安中・他 (1987)	$\log A = 0.627M + 0.00671H - 2.212 \log D + 1.711$ $D = R + 0.35 \exp(0.65M)$	硬質地盤 $V_s = 0.3 \text{ (km/s)}$ 41 地点	2 成分の 平均	地点補正を考慮した 2 段階回帰。 断層面の大きさを考慮。 式の定数項は、 V_s が 0.4 - 0.6 km/s の地点の平均値。
安中・他 (1990)	$\log A = 0.614M + 0.0050H - 2.023 \log D + 1.377$ $D = (0.2 + 0.45H^2)^{1/2} + 0.220 \exp(0.699M)$	各種地盤 50 地点 $V_s : 0.04 - 3 \text{ km/s}$	2 成分の 平均	同上
安藤・片山 (1989)	$\log A = 0.557M + 0.00691H - 1.84 \log R + 1.187$ $A = 62.5(M - 1)$ (上限値)	$V_s 0.5 \text{ km/s}$ 程度の 層の地中記録	2 成分の 最大	震中域のデータを活用。 解放基盤 / 地中 = 1.6 として解放基盤推定式に変換。
福島・田中 (1992)	$\log A = 0.51M - \log D - 0.0033R + 0.59$ $D = R + 0.006 \cdot 10^{0.51M}$	各種地盤 平均的には第 2 種 地盤	2 成分の 平均	2 段階回帰 日本のデータに外固の近距離データを加えて回帰。断層面の大きさを考慮。
太田・大野 (1992)	$\log A = 0.476M - \log X - 0.000966X + 0.546$ $X = r / (\ln(1.0(r/R)^2))^{1/2}$ $r = 10^{0.6M - 2.2}$	各種地盤、外国	2 成分の 独立	地震、地盤で層別回帰。 硬質地盤の式。 等価震源距離の考え方。

; 最大加速度 (gal) M ; マグニチュード、 H ; 震源深さ (km) D ; 震央距離 (km) R ; 震源距離 (km) X ; 等価震源距離 (km)